

(一) 老々在宅介護の新段階



(桜満開 今年も好だ)

6年前の6月、10万人に2人の割合の難病、「2年後の寝たきり、認知症必至」と「神経内科」医師団の告知に仰天。

それから、80歳代の、「要支援1」が、過酷な、「介護度5」をささえる在宅介護がはじまった。おおぜいのヘルパーさん達に助けられながら懸命の介

護に明け暮れしてきた。

が、この間、6回の入院をくりかえしてきた。

現状では何一つ楽観できるものはない。

とはいえ、まだ寝たきりではないし、目はものを言っている。だから、医師団告知の「2年後」は、「病院か施設入りの場合は」の前置詞がぬけていたのにちがいない。

6度目の入院は、身体的自由の大幅後退をもたらした。

第1に、口からの嚥下ができなくなった。

毎日、嚥下専門の看護師さんが、イチゴミルクなどで訓練を重ねてくれた。が、結局は諦めるほかはなかった。素人介護にはとうてい無理。容易に誤嚥性肺炎に直結しているからだ。

第2に、喀痰の自力排出ができなくなった。ために、常時、誤嚥性肺炎の危機と隣りあわせている。

第3に、両手足の拘縮だ。脳幹の梗塞は、両手足屈曲にダメージをもたらし硬直している。これまでの車椅子ではダメになった。手袋もできないし、靴もはけない。また、わが家のお風呂には入れなくなった。

第4に、笑顔がなくなった。あの万人を惹きつけていた笑顔は完全に消えてしまった。それでも生きていかねばならない。

第5に、自律神経失調による体温調節機能の喪失なのか。連日・連夜の異常発汗である。たいてい、それも、午前2時から5時頃にかけて、まるで川にはまったようにビショリ。パジャマはもちろん、上掛けまで濡れて毎朝の大洗濯をたやすことができない。